平成　２７年　６月　２５日

平成２６年度　財団せせらぎ　助成金使用報告書

所属	特定非営利活動法人 被災地支援団体あおぞらん	職名	理事長	助成金額	５００，０００円
氏名	青田　泰明　印	メールアドレス	aosorant@gmail.com		

研究課題（申請書に記入した内容を記入すること。）

「被災地支援活動」に関する社会学的一考察　～宮城県・福島県での支援活動を事例に～

助成金使用実績の概要（日本語で記入すること。図・グラフ等の記載は必須ではない。）

１．はじめに

本研究の目的は、東日本大震災の被災者の方々（主に宮城県と福島県）を対象に質的調査を実施し、彼らが「被災地支援活動」に対して抱く意識や価値について考察することにある。東日本大震災より３年以上が経過する中、彼らが、自身が実際に直面している社会的困難との関係性の中で、ボランティア団体等による「被災地支援活動」にどのような意味付けを行なっているのか、また、実際にどのような支援の形が希求されているのかについても検討していく。具体的には、筆者が代表を務めるＮＰＯ団体による被災地での食事提供イベントを調査機会とし、参与観察法に基づき実施した（食事提供をサポートして下さる被災者の方々、食事を取る被災者の方々などにお話を伺い、そこでの内容をフィールドノートに記録した）。

２．調査概要

２０１４年６月１５日（日）宮城県東松島市「上北谷地地区応急仮設住宅」食事提供イベント中に聞き取り実施（３名）
２０１４年７月　６日（日）福島県南相馬市「小池第二応急仮設住宅」食事提供イベント中に聞き取り実施（５名）
２０１４年７月１３日（日）福島県南相馬市「小池長沼東応急仮設住宅」食事提供イベント中に聞き取り実施（２名）

３．被災者の「語り」から見えてくるもの

被災者の方々（５０代～７０代の男女）の「語り」には、「いつまでも皆さんに頼ってばっかじゃアレなんだけどね」「ほんとに有り難い有り難い」「わざわざ遠いところから申し訳なくてねぇ」という「感謝」「恐縮」の言説が主に見られ、支援内容に対する具体的要望は特段見られなかった（「食事もいいし、たまに他のボランティアさんがマッサージしに来てくれんのも嬉しいしね」）。むしろ、「今度あんた来る時は泊まってけば良い」「また会いたいわぁ」「次ん時は何か作って待ってるから」というように、「訪問」そのものに強く価値を見出しているように感じられた。一方、各仮設住宅のまとめ役である自治会長たちは、「ここんとこは集まる機会ってあんまりない」「うちの仮設は本当に集まりが悪くてお恥ずかしい」「新しい人が入ってきたり、前の人はいなくなったりしてって、今はちょっと全部は把握できてないんです」などのように、住民が集まる機会の希少さと困難さを一様に指摘しており、「またこういう皆で楽しめる企画をお願いします」「こんなに集まるなんて信じられない、やっぱり美味しい食事だと違うんですね」と、「人が集まる」支援活動を求める傾向にあった。

４．まとめ

震災から３年以上が経過した今現在、メディアによる報道機会は減少し、支援活動の規模・頻度も縮小している。そのような状況下で、「被災地支援活動」という行為は、「他者との出会いの機会」「応援されていると感じられる機会」「忘れられていないと思える機会」としての価値をより一層強化しているように思われる。また、自治会長と仮設住宅住民の支援活動への意味付けの差異は、「住民の結束とコミュニティの活性化」という目的意識の有無の結果であると思われたが、時にその差異は自治会長側に決して小さくない心理的ストレスを生起させているようにも感じられた（「みんな自分のことばっか考えてっから」「いくら声掛けしたって全然な人もいんのよ」）。

住民が抱く「忘れられたくない」という思いと、自治会長側の「住民同士の結束を強めたい」という願いは、支援活動の頻度・内容によっては十分に両立可能なものであろう。今後、支援者側は、その活動目的を短期的・即時的な面に偏らせることなく、コミュニティの活性化やメンタル・ケアの促進といった長期的な視座に立ったものになるよう、意識的に取り組んでいく必要があると考える。

助成金を使用した成果に関する発表（インターネットに公表されている場合はURLを記載すること。）

発表者氏名 （著者・講演者）	発表課題名 （著書名・演題）	発表学術誌名 （著書発行所・講演学会）	学術誌発行年月 （著書発行年月・講演年月）

（管理番号：　　）